

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第二百二十六号

原告団レポート

CO患者——
森 秀雄 さん

家族と共に

CO患者・森秀雄さんは、昭和四年九月二十九日生れだから今年四十九歳になる。三川鉱に坑内運搬工として入社したのは、昭和二十二年六月二十一日。十八歳のときだった。

荒尾市大島下区二二三番地に住んでいる。二年ばかり前、長く住んでいた大牟田市新港町の三川鉱員住宅から移り住んだ。

次の家族がいる。
何といっても、頼りは妻の勝子さん。四十二歳(昭和十二年二月二十三日生れ)。市内の某塗装店の塗装工。もっぱら、三井三池製作所港工場、機械類のペンキ塗り。

勤務は、午前八時から午後五時まで。零細企業の常で、残業することが多い。毎日家からバイクで通勤しているが、帰りは夜遅くなることがたびたび。

長男は正修さん。二十三歳(三十年六月十四日生れ)。水島コンビナート(岡山県倉敷市)にある川崎製鉄で働いている。
長女が美奈子さん。二十歳(三

話を聞けば

とある日、森さん宅へ。本人、妻の勝子さん、それにじいちゃんとおばあちゃんがテーブルを囲む。包み隠しのないところで、CO患者の森さんはどうですか。勝子さん、短気になってしまっていますね。原因はなにの腹かいて。こつちがいになりたたかれていますから。

森さん、うそを。俺がたたくね。——やっぱり、CO患者ですというわけか。

勝子さん、一度や二度のことではないです。カッとなる本人には、わからないことも知れませんが、ダメです。

森さん (勝子さんの方にちよつとすんで見ながら) そげお前は、なすにもなかった人間じゃったで。

勝子さん、さうい、今は家何かにうと、短気を起こすことなつてもうたつてすたい。

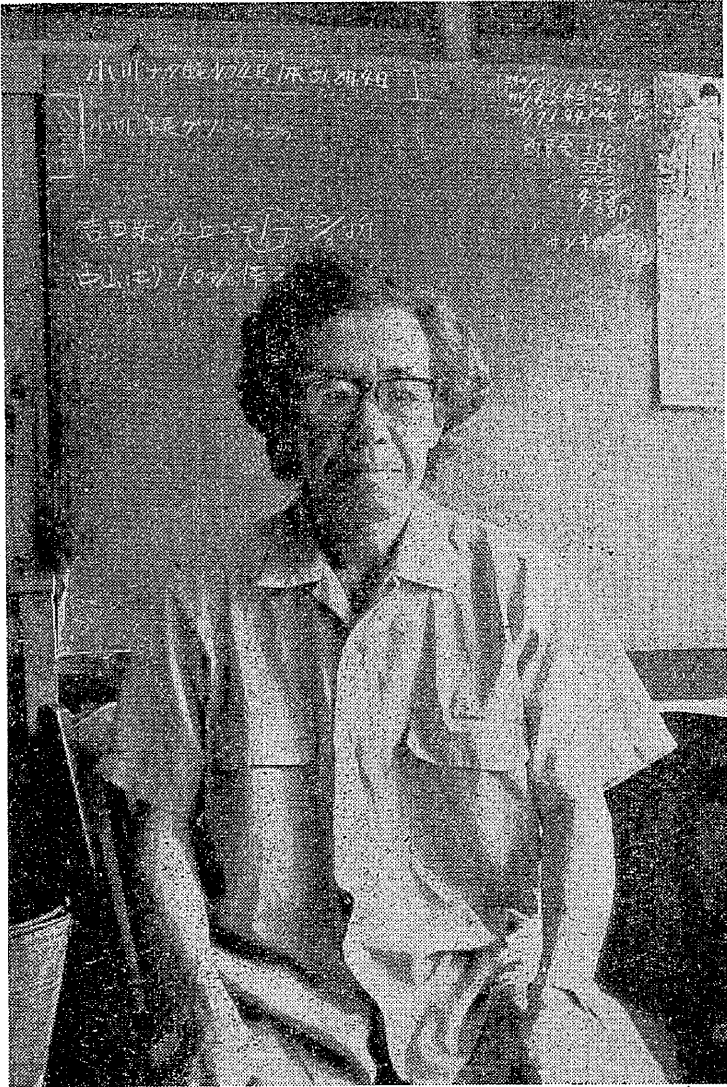
——お宅も同じなんですね。潤也君という小さいお子さんがいるようですが、テレビのチャンネル争いなどは、

勝子さん、子どもの方です。——じゃ、森さんがカラーの方子さん。目と鼻と口だけが、ぐるぐる巻きにされた句の間のからのぞいている患者を示されても、まさかこれが自分の夫だろうかと疑わずにはいられなかった。

積もる資本への怒り

父はケガした身でクビを切られる

大火傷の痕こそないが



倉庫のなかで一人ぼつんと……

変った人間

彼はあの爆発のとき、その直撃をうけ、着ている作業衣から出ている頭、顔面、両手などすべて大火傷を負った。大爆発音とともに、彼が歩いていた四百五十メートル坑道を大きな火の固まりが突っ走っていったのだ。

大正十四年、二十六歳で坑内機械工として入社。その翌十五年五月十日のこと、とまっているポンプのなかに右手を差こんで作業していたとき、だれかスイッチを入れたか不意に始動したピストンにより、右手首から先を押ししじがれてしまった。二十五針も縫うほどの大ケガで、三井大病院で治療したものの五本の指はついに変形したまま動かなくなつてしまった。二年後、三川鉱の勤務から「やめくれん」。

そのとき、クビとひきかえにもらったのが、労災補償一時金の千三百五十円に、ほぼそれと同額の退職金。合わせて二千七百円ばかりだった。勤務では親切でかまじい「いっそ、その指は切つてしまつた方がよか。切れば障害年金はもらわれるばつてん、切らんならそれもあるえん」といったところが、ひどい話である。

「お父さんがお父さんなら、私も私で、子どもの世話はいっさい

ひどい事実

生産第一主義に目がくらんだ余り、恐るべき大爆発をひき起こしてしまった資本の犠牲。

「家族ぐるみで聞きましたたんも」と、おばあちゃんも口を出した。自分のつれ合いの一人さんにケガをさせたばかりか、そのことを理由にクビにしたり、あるいは大事に娘婿をクビ切つたりした会社への怒りの、押えられるはずはなかった。

今は倉庫番

昭和四十一年の十月、政府から労災補償を打ち切られた彼は、仲間たちとともに職場に復帰した。坑内労働に耐えるはずのない体。仕事といつてもせいぜい、坑外職場での機械類のサビ落としや、工場周辺の草むしりなどだった。一度はすすんで希望して、選炭工として選炭場で働いたものの、はげしい労働が原因でか、悪性の胃潰瘍や腹閉塞の大病を招いてしまい、二度も大手術。今は選炭場の一つの新港作業所で、倉庫番。仲間たちに守られながら、各職場で使われるショベルやワッハシ、クワ、ボンコシ、仕繰ノミ、除草器、チェーンブロックなど、もっぱら工具類の貸出し。仕事を終え、家に帰ってからの日課といえば、フロボかし(石炭燃料)に、子どもの潤也君とチャネルを争いながらテレビを見る楽しみだけ。仲間とスクラムを組みながら三池闘争を闘い抜き、その後のあらゆる資本の攻撃に耐えながら、力強い足どりで、三池の歴史を刻みながら歩いてきた人間はどこへいつてしまったのか。

たたずまい

彼の住まいのあるところは、有明海の海岸に近いあたり。海岸沿いに、南北に向かつて走るたつた広いアスファルト道路に副つて、天候のよい日など、あるいは海風の香さえただよってくるのではない。

日記は告発

思えばあの三池闘争のとき、ホッパビケを一日と休まずがんばった森さん。妻の勝子さんは迷わず、明るかった家庭のなかが大爆発を境にがらりと変って暗くなってしまったのである。